

幕末の西本願寺



かりみどう
仮御堂として使
きたしゅうえしよ
われた北集会所
は1873年3月に播
州本徳寺に移築
され完工を見た。

北集会所は阿弥陀堂の北に位置し、1792年に建てられ仮御堂として使用されました。幕末に一時新撰組が屯所として占拠し、北側の柱2本に刀傷が多数切込まれています。

『本徳寺建造物文化財指定理由書』

本徳寺本堂は兵庫県下における最大の仏堂であり、様式的にも一八世紀末を代表する優れた建築である。本徳寺では幕末にそれまでの本堂が焼失してしまい、一時本堂を欠く時期があった。しかし、明治に入って本願寺の伽藍の整理があり、明治二年（一八七三）に亀山本徳寺の本堂として譲り渡したことが本願寺資料に見えるから、これが現本堂であることがわかる。それについては古老の伝承もあるし、本堂の棟瓦や床材の銘によっても実証される。この種の本堂としては珍しく妻入であるのも、集会所の当時から妻入形式の仏堂であったためである。本願寺の「北集会所」の建立については詳しくは分からない。安永九年刊行の都名所図会の本願寺の絵には、「北集会所」の位置（阿弥陀堂の北に東向きに建てられていた）にはない。しかし、安政四年（一八五七）に阿弥陀堂の修理があって、「北集会所」を仮本堂として本尊を遷座したが、その折に寛政四年（一七九二）以来、ここに安置していた太子御影・法然御影・六高僧御影を、堺御坊に下附したことが本願寺資料に見えるから、安政四年には存在していたことは確かであろう。「北集会所」を建ててこれらの御影を安置したと考えれば、この年を一応の建立年代としてよいだろう。後の慶応元年（一八六五）から同三年（一八六七）まで、新撰組の屯所になったと云う記録が「明如上人伝」「本願寺史」にある。従って、この本堂（北集会所）は本願寺の伽藍を構成する主要な建築であり、かつ江戸時代後期の京都における浄土真宗の大規模な仏堂の一つである。なお、本願寺では南集会所も妻入形式である。移築の際は増改築を行わずそのまま建てられたらしく、その折の改変の痕跡は見あたらない。だから、この本堂は、亀山本徳寺の本堂であるといえるだけでなく、本願寺の伽藍の変遷を知る上でかけがえのない遺構である。しかも、規模も壮大で構造・形式ともに優れたものであり、江戸時代後期初頭の仏堂建築の代表作といつて過言でない。（多淵敏樹）

西本願寺・北集会所が播州・本徳寺に移築された経緯

この「北集会所」は寛政以前(1760-1792)に仮御堂として、本山・阿弥陀堂の北（現在の本願寺派宗務所から隣地境内にかけて）に東面並行して建立されていた。須弥壇・厨子を設けて、法宝物を安置し、儀式、集会などに利用された。

幕末、1864年7月禁門の変の際、長州兵数十人が西本願寺に逃げ込み、広如上人の援助で落ちのびた。この時、西本願寺の総門、学林講堂、総会所等が焼失した。当時、西本願寺門主は諸国門末に勤王攘夷を諭し、勤王派の色を濃くしていた。また、維新政府に献金するなど、新政権樹立に極めて協力的であった。坊官の追放、本末関係の解体など本願寺旧秩序の解体後、日本国家の形成と同化して本山内でも長洲藩の僧侶が大きな勢力を持ちつつあった。この国家の揺籃期、京洛の巷は、勤王、佐幕の徒が混入して、本山要人・松井中務が横死するなど、物情騒然としていた。（勿論、本願寺内部の勢力は長洲一辺倒ではなく、反長洲の勢力もあった。後に明如上人による本山東京移転を企画した本山改革が長洲政権への反発として企画され実行されようとした側面も見逃せない。しかるに、この改革があっけなく明治政府とそれに連動した勢力に封殺されたことは有名である。しかし、その後、近代国家と密接な関係にあった一部の覇権勢力による宗門独占の是正がバネとなり早期の議会開設となって結実したのである。）

いずれにせよ、混乱の渦中、新撰組による京都警護の警戒地区は祇園と西本願寺であると言われていたほどで、本願寺が勤王派の拠点の一つとなっていたことは確かであろう。当時、新撰組構成員が百五十人近く膨れあがり、壬生屯所が手狭になっていた。長洲勤王派への牽制の意向もあったと推測されるが、1865年春、新撰組は屯所を西本願寺・北集会所に設置したのである。実際には北集会所並びに太鼓楼周辺建造物を取り入れた境内の一角を矢来柵で区切り使用していたらしい。

その間、新撰組は訓練にかこつけて、広如上人が砲声を嫌うのを知りながら、行事の喚鐘が鳴ると同時に、これに合わせて空砲を放った。また、この屯所にはいろいろな物売りがやってきた。なかでも洛外の女達が猪の肉を車に積んで隊士に売り、施設内で鍋で煮て食したため、その臭いが門主の居住地まで流れていき、大層閉口された。本願寺はたまりかねて会津藩を動かし、会津の公用方から、「洛中においての大小砲の発声は禁裏に対し憚りがある」と隊長・近藤勇に注意があり、なんとか大砲訓練だけは中止された。

北集会所での屯所経営は1867年6月15日まで存続した。本願寺は新撰組のこれ以上の滞留を回避するために、西九条村に土地と家屋を用意し、彼らの退去をうながした。この本願寺のはからいにより新撰組は新築の不動堂村屯所に移るが、そこには半年足らず滞在しただけである。不動堂村屯所（約三千坪）の場所は定かではないが、現在の「リーガロイヤルホテル京都」の可能性が高い。北集会所は、新撰組の退去後直ちに解体され、焼失した学林の講堂とすべく資材として保管された。

一方、播州・本徳寺では、1854年、安政の大地震のため、本堂が大破し、その後直ちに再建が進められた。1868年にはほぼ完成を見るに至ったが、廃仏毀釈、世情不穏のあり、大工小屋から出火、新築本堂と中宗堂が灰塵に帰した。播州における本願寺行政に支障をきたすため、本願寺は、学林（龍谷大学）の大講堂に予定されていた北集会所の用材をもって本徳寺の本堂に当てることを決めた。資材は海路運ばれ、三年の歳月をかけて移設され、1873年3月に移設の完成を見た。

棟瓦には、本願寺・阿弥陀堂と同様「紀州鷲森御坊講中・河州無量光寺門徒中」の寄進銘が陰刻され、床板の裏には本願寺名を墨守した床材が使われている。伝承は、本山よりの解体資材が海路飾磨津に運ばれ、同行の手渡しにより、飾磨街道を経由して、亀山に運ばれたことを伝えている。また北側二本の柱には刀痕が残り、新撰組の占拠跡を生々しく物語っている。（大谷昭仁）